



## 【役員名簿(2019年10月現在)】(五十音順)

代表：結城 正美 (金沢大学)  
副代表：小谷 一明 (新潟県立大学)  
顧問：上遠 恵子 (レイチェル・カーソン日本協会)  
西村 頼男 (阪南大学名誉教授)  
事務局長：辻 和彦 (近畿大学)  
事務局補佐：  
日野原 慶 (大東文化大学)  
山田 悠介 (大東文化大学)  
会計：河野 千絵 (日本大学・非)  
浜本 隆三 (甲南大学)  
監事：村上 清敏 (金沢大学名誉教授)  
ニュースレター編集委員：  
澤田 由紀子 (甲南大学・非)  
菅井 大地 (松山大学)  
中垣 恒太郎 (専修大学)  
会誌編集委員：  
相原 優子 (武蔵野美術大学)  
樋口 大祐 (神戸大学)  
平塚 博子 (日本大学)  
Bruce Allen (清泉女子大学)  
松岡 幸司 (信州大学)  
コンピューターセンター：  
岩政 伸治 (白百合女子大学)  
北国 伸隆 (長崎外国語大学)  
高橋 実紗子 (聖心女子大学・院)  
山城 新 (琉球大学)  
評議員：浅井 千晶 (千里金蘭大学)  
太田 雅孝 (大東文化大学)  
大野 美砂 (東京海洋大学)  
上岡 克己 (高知大学名誉教授)  
黒崎 真由美 (関東学院大学)  
塩田 弘 (広島修道大学)  
塩塚 秀一郎 (東京大学)  
John Rippey (滋賀県立大学)  
管 啓次郎 (明治大学)  
高橋 綾子 (長岡技術科学大学)  
高橋 龍夫 (専修大学)  
高橋 勤 (九州大学)  
高橋 昌子  
巽 孝之 (慶応義塾大学)  
豊里 真弓 (札幌大学)  
中川 僚子 (聖心女子大学)  
波戸岡 景太 (明治大学)  
芳賀 浩一 (城西国際大学)  
林 直生 (滋賀大学)  
横田 由理 (大東文化大学・非)  
院生代表：笠間 悠貴 (明治大学・院)  
広報：喜納 育江 (琉球大学)  
塚田 幸光 (関西学院大学)  
松永 京子 (神戸市外国語大学)  
研究助成：岡島 成行 (青森山田学園)  
管 啓次郎 (明治大学)  
野田 研一 (立教大学名誉教授)  
山里 勝己 (名桜大学)  
結城 正美 (代表)

## 人新世を〈自分ごと〉とするために

代表 結城 正美 (金沢大学)

今年の夏、オーストラリアの国立気候回復センター（通称ブレイクスルー）の報告書*Existential Climate-Related Security Risk: A Scenario Approach*（『存在に関わる気候関連安全保障リスクシナリオ的アプローチ』）が、世界を震撼させた。報告書によれば、気候変動への根本的対策として、ただちにゼロ・エミッションへと舵を切らなければ、たとえば次の事態が想定される。気温上昇による食糧生産の低下、食料価格の上昇、水災害（熱波、洪水、台風・ハリケーン）の増大、生産される食料の栄養価の低下、昆虫類の壊滅的減少、水不足の深刻化、メコン川やナイル川流域など農業生産上重要なデルタ地域や、ムンバイ、ジャカルタ、広州、香港といった都市の水没。こうした予測にもとづき、報告書は、今すぐに対策をとらない限り、2050年に文明が終焉に向かう可能性が高い、と警告している。

2050年。これは想像することが困難な未来ではない。子や孫の顔が浮かぶ人は少なくないだろうし、10代、20代の若者ならば、ちょうど働き盛りである。想像はできる。しかし、行動が伴わない。今や世界的に有名になったスウェーデンの16歳、グレタ・トゥーンベリは、気候変動への政治的対策を求めて2018年に学校ストライキを始めたが、彼女の行動には、問題がわかっていながら即座に動こうとしない大人への不満と憤りが表れている。

終末論的シナリオは、大きな衝撃をもたらすにもかかわらず、あるいは、衝撃の大きさゆえにという方が適切かもしれないが、必ずしも人を行動に駆り立てるわけではない。人新世をめぐる議論は、否応なく終末論的になる傾向がある。事態が事態だけに当然であろう。だが、スケールが大きすぎると、事の緊急性を頭ではわかっていても、自分ごととして実感することが難しいのも事実である。

ケント大学教授（英文学、環境人文学）のヴァイバー・クリガン＝リードによる*Primate Change: How the World We Made Is Remaking Us* (2018) も、人新世の問題をめぐる終末論的シナリオと無縁ではない。だが、この本は、取っつきやすく、行動しようという気を自然と起こさせる点で、他の人新世本とは一線を画する。人新世の代名詞とも言えるclimate change（気候変動）をもじった書名にも、ユーモアが感じられる。出版されるや各種メディアで絶賛さ

れ、BBC World Serviceでは、この本にもとづいた特集（The Compass, “Changing World, Changing Bodies”）も組まれている。刊行後まもなく邦訳『サピエンス異変—新たな時代「人新世」の衝撃』（2019）も出た。英文学者の書いた本としては異色である。

内容自体は、とくに目新しいわけではない。たとえば、家でも職場でも椅子に座っている時間が長く、車や電車で移動するためほとんど歩かない生活が、筋力を衰えさせ、腰痛を引き起こしているということ（これを読んでから、私は立って仕事をするのが多くなった）。合成添加物や保存料まみれの加工食品で済ますことの多い食生活が、糖尿病をはじめとする生活習慣病の最大の原因になっているということ（これは以前から知っており、食料品を買うときは、商品裏面ラベルの原材料を確かめてからにしている）。これらは一部に過ぎないが、論じられていることのほとんどは、わりとよく知られている事柄である。

しかし、こうした既知の事実を、「人新世の病」や「人新世の身体」という切り口で、読者自身に降りかかっている問題として論じたところに、『サピエンス異変』の新しさがある。800万年に及ぶ人類史をたどり、人間の活動によって変化した環境と、その環境の変化に適応するために人間が遂げてきた身体的変化のバランスが、人新世で崩れてしまったことが、説得力とユーモアをもって論じられるのだが、なかでも注目すべきは次の点であろう。すなわち、文明が環境を修復不可能なまでに変化させてきたという、これまで人新世の議論を形作ってきた視点を反転させ、文明によって今や人間自身が危機的な身体的変化を被っているという新たなシナリオを示したことである。言い換えれば、『サピエンス異変』は、人新世が〈自分ごと〉として捉えられるような視点を提供することに成功している。だからこそ、実感をもって読まれているのではないだろうか。

著者のクリガン＝リードは英文学者であり、『サピエンス異変』には、文学研究にもとづく知見が随所に見られる。あるいはむしろ、工業化が進んだ19世紀の日常が鮮やかに読み取れるのは、文学作品をおいてほかにないことから、チャールズ・ディケンズやジェイン・オースティンの作品をはじめとする当時の「産業小説」が、人新世の身体的変化を検証する上で重要な題材となる。各パートの終わりに健康に関するアドバイスがまとめられており、一見するとノウハウ本のように見えなくもないが、お手軽に情報を得る類の本ではない。同業者の鼻屑目かもしれないが、文学研究にもとづく『サピエンス異変』には、人新世の問題を〈自分ごと〉化する上で有効な手立てが示唆されている、と私には感じられた。

冒頭で言及したブレイクスルーの報告書には、気候変動に関して、アメリカの化学者ウィル・ステッフエ

ンの見解が紹介されている。「[気候変動]は技術的・科学的問題ではない。それは、人間の社会政治的価値観をめぐる問いである。…気候システムにおける転換点（tipping point）に達する前に、我々の思考を反転させる社会的転換点が必要なのだ。」環境人文学ではよく知られている考え方だが、化学者も声を大にして主張するほど、社会政治的価値観の転換は喫緊の課題なのである。

「我々の思考を反転させる転換点」は、現代の主要な論理に挑戦するという性格上、進歩主義的言説から外れたところに見出せるものであろう。進歩主義から外れていることを非実用的とよぶ風潮があり、そうした人々のあいだでは、人文学がその最たるものとみなされているようだが、時代遅れもいいところだ。誰もが安心して生きることのできる世界に向けて、文学やアートに秘められたしたたかな挑戦に耳を傾けることが、今ほど必要とされる時代はない。それはまた、エコクリティシズムのしたたかさとしなやかさが試されている、ということでもある。





## 【大会案内】

## 2019年度ASLE-Japan／文学・環境学会全国大会

(2019年8月31日[土]～9月1日[日])

於 大東文化大学 板橋キャンパス 大東文化会館 (東京都板橋区高島平1-9-1)

&lt;第1日目：8月31日 [土]&gt;

## ●個人発表報告①

- ・岡崎朝美 (北海道大学・非) 「樹木描写からみる故郷ボヘミアの森への思い：シュティフター文学における森林機能」
- ・山田美雪 (東京大学・院) 「アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリの二つの「砂漠」：パタゴニアとブエノスアイレス」

田中 都 (元城西国際大学・院)

岡崎朝美氏は、オーストリアの作家アーダルベルト・シュティフター (1805-1868) が描く故郷ボヘミアの森や山を構成する森林の樹種に着目し、樹種名の日本語訳が正確かどうかを発表された。シュティフターは、森林機能を文学の世界に取り入れた19世紀の作家である。岡崎氏は『石さまさま』のなかの『白雲母』(1853)を中心に提起し、物語に出てくるハシバミがほとんどクルミと訳されている文章を具体的に示した。シュティフター自身が描いた森の風景が日本語訳においては違った風景となっている。ハシバミが物語の中心舞台であり、樹種の描写表現が子供たちの視点に沿った言動に焦点が当てられているが、これがクルミと訳されることによって、ボヘミアの自然風景や自然の脅威にも、またそこで生活する子供たちの言動にも一致しないものとなっているのだ。『ジプシーの少女』(『白雲母』の改編、1983 (1973)) を著述した児童文学者、山室静氏がクルミではなくハシバミと訳し、ハシバミ山と子供たちとの密着な繋がりを明らかにしていることを強調された。岡崎氏は今後も森林機能と文学がどのように関わっていくかをさらに掘り下げてみたいと述べられた。

山田美雪氏は、フランスの作家アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ (1900-1944) が不毛と野蛮の「砂漠」と定義される南米大陸南部に位置するパタゴニア地域と、そこを「征服」したアルゼンチンの首都ブエノスアイレスを「砂漠」と表象したサン＝テグジュペリ独自の思想を分析考察された。サン＝テグジュペリは『星の王子さま』(1943)の作者として日本でもよく知られているが、飛行機の操縦士でもあった。従って、飛行士の目で俯瞰した砂漠の風景との交感体験からとらえた世界観は独自の様相を呈している。負のレッテルとして「砂漠」と呼ばれたパタゴニアに、サン＝テグジュペリは異なる価値を見出し、孤立した集落を繋ぎ、人と自然、人と土地、人と人が豊かな関係を結ぶことによる「肥沃な場所」へと変換することに意識を向けた。一方、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスは「南米のパリ」とも言われ、最先端の文化を

取り入れた文明都市ではあるが、緑なき街、閉鎖的なサークル、旧弊な人間関係、男尊女卑を習慣とするいわゆる別な種類の魅力に乏しい「砂漠」であるとサン＝テグジュペリは表現している。

私は岡崎、山田両氏の発表から、「場所の感覚」の獲得を考えてみた。シュティフターはボヘミアの土地に帰属し、自分は生態系の一部であると自覚することで「場所の感覚」の獲得は容易であろう。一方、サン＝テグジュペリは、飛行士の立場から「砂漠」と表象したパタゴニアもブエノスアイレスのいずれも、ウォレス・ステグナーらが提唱した従来の定住・ローカル型「場所の感覚」とは違った視点を提供していると感じた。

●クレア・ロバーツ  
ポエトリーリーディング&トーク

Bruce Allen (清泉女子大学)

A highlight of the 25th annual ASLE-Japan conference was the poetry reading and talk given by the Canadian poet Clea Roberts. In her talk, Clea wove together her thoughts on the connections between the act of writing poetry and her experiences of living in close contact with a wilderness environment.

Originally raised in an urban environment in Vancouver, Canada, Clea moved to Whitehorse, a village surrounded by the Yukon wilderness, where she has now lived for nearly twenty years. In the Yukon, she was challenged, and gradually learned to reorient her life to the beings, rhythms, times, geographies, demands, and beauties of the wilderness environment, while at the same time she raised a family and developed her work as a poet.

Three central questions that integrated her talk and poetry were: 1) How does wilderness impact our sense of self and our perception, and by extension, our approach to poetry? 2) How can poetry help us to navigate a new physical landscape, while simultaneously allowing us to articulate previously ineffable emotional landscapes? and 3) How does wilderness enable truth-telling and authenticity.

Canada's Yukon region, she explained, is somewhat larger than the entire land area of Japan. Whitehorse, the Yukon's capital and the place where she lives, is more like a village than a city. To mention a reality that is perhaps difficult for most of us who live in large urban areas to imagine, the entire Yukon has only 0.07 people per square kilometer. How did her move to such a location surrounded by

wilderness influence her life and poetry? At first, she explained, it brought to her a profound sense of solitude. This sense of solitude eventually enabled her to change her view of the world from an ego-centric one to a more eco-centric one. She was continually pressed to confront the question of the degree of her integration with nature and the question, Am I a part of nature—or am I apart from nature?

Initially, she experienced a deep sense of dislocation and unfamiliarity with her new surroundings. She mentioned, as an example of this sense, how in her early days in the Yukon she first looked up at the night sky and saw what looked like a glow from distant city lights—a reminder of the polluted skies of the cities and towns she had known. Only as the light grew stronger, more colorful, and more shimmering did she realize that what she was seeing was the aurora borealis of the northern wilderness, shining over her. The new geography brought her a new sense of belonging and a new imagination.

As a newcomer, the wilderness challenged her to reorient herself, both in terms of geography and time. It brought a radical expansion—as well as a contraction—of her sense of time; a sense that was deeply connected to the widely changing lengths of days and nights throughout the seasons in the arctic. As she lived in and became an inhabitant of this new environment, she found that “wilderness demands poetry.” In part, this change came from the way that wilderness encouraged and allowed her to “experience my own insignificance.”

Later experiences, including those of childbirth and losing loved parents, helped her to develop the dimensions of her poetic world, extending them from explorations of external landscapes—the focus of her first collection of poetry, *Here Is Where We Disembark* (Freehand, 2010)—to the explorations of more internal landscapes, in her second collection, *Auguries* (Brick Books 2017).

Speaking of the poet’s mission, Clea suggested that it is “to be present in the small moments—moments that turn out to be far more important than we had ever imagined.” Truth-telling and authenticity, she said, are the essential work of the poet. In this work, the sense of awe provides the “directional tool,” the compass that leads us to truth and authenticity.

Clea read a number of poems from both of the above collections, showing the rich poetic imagination that has sprung from her experiences in the Yukon wilderness. Her collection *Here Is Where We Disembark* has been translated into Japanese by Professor Toshi Takagishi and published by Shichosha Ltd., making her poetry available to a wider Japanese reading audience.

To mention a personal reaction to Clea’s talk and poetry reading, I was impressed, and pleased, to see how her poetry—that of a writer whose experiences are so rooted in wilderness experiences that are seemingly quite different from those of most of us

living in modern urban environments—is so able to embrace the universal concerns, passions, fears, dreams, and possibilities faced by all people, whether we live in urban, rural, or wilderness environments. Her poetry and talk suggested new possibilities for bridging gaps—both real and imagined—among those of us living in a wide variety of contemporary environments, and for working together toward common goals.



## ●シンポジウム1： 「カリブ海地域の文学と動物、環境、自然」

登壇者：岩瀬由佳（東洋大学）、齊藤みどり（都留文科大学）、中村隆之（早稲田大学）

五月女 颯（東京大学・院）

当シンポジウムは、その表題が示すとおり、カリブ海地域の文学作品に描かれた動物、環境、自然の諸表象を分析することに主眼が置かれている。その際、理論的基盤として前提されるのは、これまでカリブ海文学はクレオールやハイブリディティといったポストコロニアル的テーマからこれまで論じられてきたが、その根底にはエドゥアール・グリッサン（1928-2011）が『関係の詩学』で論じた、他を排除することで成立するヨーロッパの単一根的な文化に対しての、カリブ海地域にはリゾーム的な文化の概念があるということである。

まず岩瀬由佳氏は、トリニダード・トバゴ生まれで現在はアメリカで作家・教授として活躍する Elizabeth Nunez (1944-) の自伝的小説である *Anna In-Between* (2008) や *Boundaries* (2011)、またメモワールである *Not for Everything Use* (2014) を分析し、そこで表される著者と家族（特に母親）との関係を家族の神話の再構成として捉え、それら作品群をアウトサイダーとしての著者のアイデンティティを回復する試みとして論じた。自然との関係に関して言えば、母の魂としてのフクロウや、父母の死後に実をつけなくなるマンゴー、聖母マリアの象徴としての白ユリなどが挙げられる。特に前二者は、ノンフィクションであるメモワールの中で書かれるにには奇妙な挿話だが、岩瀬氏の論考によれば、それは個人的な家族の物語を神話化する効果があるという。グリッサンに基づけば神話は暴力的で単一根的なものだが、移民としての著者の略歴を考慮すれば、それはむしろリゾーム的なものとして理解されるべきものである。

次いで、齊藤みどり氏は Marie Vieux-Chauvet (1916-1973) の *Love, Anger, Madness* (1968) における自然や女



性の搾取に焦点を当てた。ビュー・ショヴェはハイチの女性作家であるが、作品はデュヴァリエ政権より検閲を受け、政権が倒れたのちの1986年になって「再発見」された。作品では、山野がアメリカ企業により荒廃していく様子や、また祖先代々の土地を守るために家長が地主に娘を差し出す様が描かれている。このことは、土着主義が女性の苦しみを具体的に描いてこなかったことへの批判として、また同時に女性と自然を重ね合わせることで、それらを支配することへの批判として読むことができ、今日のエコフェミニズムに通ずるのではないかと指摘された。

中村隆之氏は、グリッサンの小説『痕跡』（1981）における動物の表象に注目する。作中には犬、豚、蛙、蟻、兎、蜥蜴、羊、驃馬、鳥、魚、蛇、雄牛、鰐、猿、駱駝など、豊かな動物像を認めることができるが、その中から中村氏は蛇、犬、雄牛、蟻を分析の俎上に載せる。蛇や犬は人間を脅かす敵対的な存在として表象される一方、雄牛のエピソードは神話的で原初的な風景を提供すると同時に、女性を独占する存在でもある。また蟻は黒人の表象であり、四方に散る蟻はアフリカから追われた黒人のメタファーだと明快に論じられた。

「カリブ海地域の文学」の中にも、言語など様々な差異がある一方、質疑応答の際にも言及されたように、その共通点としてプランテーションや奴隷制が挙げられる。それら共通項と動物や環境、自然といったエコクリティシズム的な関心をいかに連関させるかという将来的な可能性について、シンポジウムはきわめて示唆的であったように思われる。



<第2日目：9月1日 [日]>

## ●和合亮一 ポエトリーリーディング&環境詩

小谷 一明（新潟県立大学）

和合亮一氏の詩を英訳している高橋綾子会員による環境詩の解説でこの企画はスタートした。和合氏は今も教員として高校生と向き合う日々を送っているが、20歳の頃に福島大学で西脇順三郎最後の弟子と言われる澤正宏の指導を受け、詩作を始めている。20代はオートマティスム（自動筆記）に傾倒し、シュールレアリスムの詩を同人誌に投稿していたようだ。吉増剛造のような、どこかに飛んでいきそうで、傷つくこともあるが情熱をぶつけるような詩に憧れていたという。和合氏は詩人としてのこれまでを振り返り、文学には「良心」があると語った。詩に勤しむと、詩が自分を助けてくれるという意味である。



高校の教員となり最初の赴任地が南相馬だった。そこで6年ほど暮らしたという。東日本大震災では20代の記憶が深く絡みついた南相馬から、津波で亡くなられた教え子やご家族の報せが和合氏のもとに届いてくる。阿武隈山地で隔てられた中通りの福島市に住む和合氏だが、津波の被災地と切り離せない震災経験ができていく。また、福島市は甚大な原発災害に見舞われ、線量の最も高い市となった。3月11日、原発で働いていた教え子から電話があり、爆発するから逃げてと和合氏は言われている。福島市では14日から本格的な避難が始まったが、足の不自由な父がおり、和合氏は福島での避難所暮らしを決意した。妻と小6の息子は遠方に避難したが、別れ際に息子から「また会えるよ」と言われ、深い孤独が襲ってきたという。

目の前の超現実シュールレアリスト詩人は言葉を失っていた。しかし、揺れ続ける地面に鬱状態となりながらも、安否を気遣う人への返信としてツイッターに「詩の礫」を書き始めていく。「放射能が降っています」はこうした状況で生まれた詩であった。日々書き続けるなか、3つの人格が詩に現れたという。暴力的な人格、幼児退行したかのような人格、理性的な人格である。「俺」「僕」「私」など主語によって文体も変わったが、書くことで自分と向き合えるようになった。ふと啄木が一晚で書いたと言われる「一握の砂」を思い浮かべ、誰かのためではなく、自分を回復、再生するための詩であったことに気づいたという。こうした詩が読まれ続けてきた伝統が、日本の文学にはあると和合氏は述べた。

また、詩作はお経のようでもあったと語る。多くの人が亡くなるなかで、こつこつと何かをし続けることは死者への供養であったのだ。福島、東北は地震と津波、原発災害でことごとく分断された。避難をする、しないという考えの違いで友情が壊れている。そのなかで言葉に「防護服」を着せず、思いを言葉に託し続ける和合氏は、今「未来神楽」の活動に取り組んでいるという。未だ見つからない死者を探し続ける者があり、その隣で暮らす自分にできること、それが創作神楽だった。揺さぶられて気づいた地球に向けた歌と舞い、それはまさに復興と祈りの詩であった。

## ●個人発表報告②

- ・神沼尚子（在野研究者）「記憶を刻むplace name：アラスカから東日本まで」
- ・佐々木郁子（龍谷大学）「ワーズワスの『逍遙』における農業と持続可能性」

馬場 理絵（東京大学・院）

神沼尚子氏による「記憶を刻むplace name：アラスカから東日本まで」では、地名と先住民をめぐる侵略の歴史の問題が、アラスカと日本を例に広い視座から検討された。ゲーリー・スナイダーの作品の一つ、『亀の島』のタイトルが意味するものは、かつて先住民によって亀の島と呼ばれた北米大陸である。スナイダーがこの作品で試みるのは、「亀の島」の場所の記憶の回復である。神沼氏は、このような視座に強く影響を受け、土地の記憶をめぐるさまざまな考察を試みられた。アラスカの地名や日本の地名は、侵略の歴史や災害の歴史をいかに記憶するのだろうか。また神沼氏は、名付け行為と土地の関係性をめぐる考察が、人々のさまざまな自然観の違いを明らかにする可能性にも触れられた。

佐々木郁子氏の「ワーズワスの『逍遙』における農業と持続可能性」では、ウィリアム・ワーズワスの『逍遙』に見られる作者の農業観が多角的に考察された。伝統農法と近代農法をめぐる詩人の農業観は、これまでも注目されてきた重要なテーマの一つである。本発表は、今まであまり試みられなかった『逍遙』におけるワーズワスの農業観に注目することによって、新たな視座から詩人の農業観への理解を深めるものである。佐々木氏は、『逍遙』におけるワーズワスの農業観は、これまでに論じられてきたような伝統農法対近代農法という単純な二項対立のうちに捉えられるものではないと指摘する。詩人は両者を対比させ、排他的で急進的なものとして後者を強く批判していると考えられてきた。だが、農業改良が始まり、食生活の改善が見られるようになった当時、詩人が前者を持続可能なものとして評価していたと性急に結論づけてしまっているのだろうか。佐々木氏は、アダム・スミスの『国富論』が与えたワーズワスへの影響を認めつつ、詩人の農民に対する眼差しの独自性を指摘する。『逍遙』の語り手たちの対話は、伝統農法と近代農法のどちらによってもなし得ることができない、社会的弱者である農民の心身の健康を実現する持続可能な農業のあり方を模索する詩人の姿を浮かび上がらせるのである。

ある種の記憶を抑圧する名付け行為だけではなく、人々の記憶や祈りを記録する名付け行為がある。災害の記憶と土地の歴史は、東日本大震災の記憶と土地の関係によっても大きな変化を経たという神沼氏の指摘は大変興味深い。佐々木氏の発表は、ワーズワス独自の農業観を持続可能性というキーワードによって浮き彫りにするものであった。詩人の自然観は、ともすれば「上流気取りで排他的」とみなされることもあるが、佐々木氏の発表はこのような批判に対する重要な視座を提示している。

### ●個人発表報告③

- ・劉靈司馬（明治大学・院）「『人民日報』はいかにして自然災害の「真実」を報道するに至ったかー「災難報道」にみる現代中国の環境論的転回」
- ・豊里真弓（札幌大学）「津島佑子『ヤマネコ・ドーム』における不安、恐怖と時間の表象：ポスト・フクシマの風景とホーム」

横田 由理（大東文化大学・非）

劉靈司馬氏は、まず現代中国における『人民日報』

の特殊な位置と影響力について述べたあと、1950年代～1970年代にかけての災害報道が、「報喜不報伏（望まじきことを報じ、不都合なことは伏せる）」という中央本部の基本方針の下、死傷者数など都合の悪い情報が隠蔽され、環境意識の醸成にも大きな障害をもたらしたことを報告された。しかし、1980年代から災害の原因追及や環境保護への呼びかけなど客観的報道と環境思想の芽生えが見られるようになり、2008年の汶川大地震の際の全面的な情報開示という災難報道の方針転換により、以後の環境人文学思想の根幹となる「以人为本」（人をもって本となす）という生命尊重の思想が築かれる。「党本位」から「人本位」という災害報道における意識変換を環境思想と結びつけた意義深い発表だったと思う。興味深かったのは、特に洪水災害に関しては古来より「民の指導者が水を制する、人はやがて天に勝つ」という民話的な思想が洪水災害の特殊性、危険性につながったという指摘であった。急激に国力を増してきている大国、中国における環境意識の在り方は重大で、「人新世」という地球規模の環境の中で生きる人類及び地球全体にとってその影響力は測り知れない。発表のあった日の夜、ある民放で中国の青年がネット上の政府に不都合な情報は消されていくと語っていた。真実を伝えようとする勇氣ある声は劉氏の発表共々貴重だと感じた。

豊里真弓氏の発表も「隠されたもの」をめぐり、津島佑子の『ヤマネコ・ドーム』とポスト・フクシマの風景を＜不安、恐怖＞と＜時間＞をキーワードに読み解こうとする意欲的な論考であった。第二次大戦後の在留米兵と日本人女性との間に生まれた二人の子供と、彼らと同じ境遇の子供たちを育てた女性の娘を語り手に、彼らが幼いころ経験した友人の溺死事件が、その後の人生においても絶えず問い直される不確実性を持ち、不安や恐怖を誘発する出来事であったことと、2011年の東日本大震災の放射能汚染のもたらした不安と恐怖が、＜場所＞と＜時間＞という共通の視点から考察された。

『ヤマネコ・ドーム』の近隣社会から疎外された語り手たちを取り巻く風景の持つ曖昧性、意味の不安定性は、放射能に汚染されたフクシマの風景の不可視性と同様、一般的に共有しがたいものであり、個人的な記憶の曖昧さや重層的な内的風景と社会的現実との軋轢は、不確実で停止した時間の中に語り手たちを置く。死者と生者の声、過去と現在が混在し、時間の枠組みを超えた非近代的な空間の中に未来的な「ホーム」の可能性を模索する津島の作品世界には、2016年の福井大会で訪れた様々な場所で我々が感じた「痛み」と「不安」の意味を問い続けることの重要性、フクシマという場所を共有するための方策が提示されているのではないかと発表を聞きながら思った。

### ●シンポジウム2：

「ドイツとアメリカにおけるダーウィン受容の諸相：ダーウィンとダーウィニズムの距離」

登壇者：磯崎康太郎（福井大学）、宇和川雄（関西学院大学）、西尾宇広（慶応義塾大学）、浜本隆三（甲南大学）

多田 満（国立環境研究所）



ダーウィンの進化論に関する学説は「強者の理論」として批判を浴び続けながらも、あらゆる文脈で語られ展開されてきた。本シンポジウムはダーウィン受容の黎明期とされる19世紀半ば以降、ダーウィンの思想が、思考や解釈の前提と化していった20世紀前半に至るまでのドイツとアメリカの文学、(社会)思想からこの問題の多彩な諸相の一端を検討する。そのことで、「ダーウィニズム」と「ダーウィンの学説」の隔たりについて考察がなされた。

まず、西尾宇広氏の発表では、19世紀後半のドイツの医師ルートヴィヒ・ビューヒナーを中心に、「社会ダーウィニストの夢と憂鬱」をテーマに「社会ダーウィニズム」と総称しうる社会現象について考察する。そのうち、唯物論的世界観を決定づけるものとしてダーウィン理論が進歩史観への信頼の強化あるいは市民社会からの人間性の剥奪に関して四段階で受容されたとの説明は、興味深いものであった。

磯崎康太郎氏は、「リアリズム、自然主義文学におけるダーウィニズムと道徳観」をテーマに、ドイツの写実主義、自然主義文学から、19世紀後半のダーウィニズムについて考察する。ダーウィニズムと道徳について「人間の倫理的性質は、最も高度な水準にまで達した。それには道徳を通して、共感の心がさらに強く、広い範囲にまで及ぼされるようになったからである」とダーウィンの引用を紹介する。人間の進化と道徳の結びつきに関する言説は新鮮であった。

浜本隆三氏は、「アダムと細菌—進化論とマーク・トウェインの文明批判—」をテーマに、アメリカ社会への進化論とトウェインの文明批判を読み解く。進化論によりアダムは世界から追放されたこと、アダムは無垢なる悪を背負わせられたこと。無垢なる悪、細菌、

人体は細菌を育てていること。さらに「キリスト文明を外から眺めていたオーストラリアでは、適者生存の例とされる洋上のカモノハシはノアの箱舟には乗れなかった」と興味深い解説がなされた。



最後に宇和川雄氏の発表では、「ベンヤミンとダーウィンの進化論について」をテーマに現代ドイツ思想におけるダーウィン研究の、反ダーウィニズムを掲げたヴァルター・ベンヤミンの思想との重なり具合を検討する。ダーウィンが「自然環境における種の生存の歴史的展開を考えていたのに対して、ベンヤミンは、「第二の自然環境 = (歴史)」における人間の生存の可能性を>を考えていた。人間は、みづからのつくりだした歴史のなかで、過去と向き合いながらいまこの時を>どう生きるのか—その新しい問いを投げかけている。

その過去との対話のみならず、来たるべき未来に向けて「人間であること」「どう生きていくのか」を人びとの社会対話のなかで問わねばならないであろう。



2019 ASLE-Japan 全国大会 1日目にて

【ASLE-J Grad Journal (院生組織だより)】

## 2019年度全国大会 院生組織グループ発表報告

江川 あゆみ (早稲田大学・院)

今夏の全国大会、院生組織では「見えない景色を旅する」というテーマで8名のグループ発表を行った。

前半、伊東弘樹は幸田露伴の「水の文学」を読むことで、沈められた東京の河海の記憶を浮かび上がらせる可能性を示唆した。江川あゆみは鏑木清方の随筆「新江東図説」について、「新江東」は名所江東の倂を追いつつ、郊外化のすすむ東京に抵抗を示すことで見出されたことを論じた。谷口岳は下北沢駅前市場解体で見つかった古い看板が残す外国人移民の痕跡を「次元の穴」(吉増剛造)の例とし、より多くの「次元の穴」を残す街の変化とはいかなるものか問うた。笠間悠貴は写真家渡辺兼人の作品「忍冬」について、水辺の消失に価値判断を下さず、被写体そのものへと通じる回路を開く試みであると論じた。

短い質疑を挟んだ後半、戸張雅登はゲーリー・スナイダーの詩“Night Song of the Los Angeles Basin”を読み解き、数多の存在からなるBiosphereとしてのロサンゼルス姿を浮かび上がらせた。林真はマリノフスキー

の日記と民族誌をめぐる西洋的主体の隠匿とその魔術性について論じ、三宅由夏はジーン・リースの短編「懐かしき我が家」において、白人クレオール女性の「ゾンビ」である「彼女」の視線を通して境界と変容を書き重ねるリースの繊細な筆致をたどった。最後に、青田麻未はこれまでの発表を環境美学の観点から振り返り、それぞれが論じた作品や実践を「見えない景色」を見せるフレーミングの試みとして統一的に考察した。青田のまとめは多岐に亘った報告をいま一度「見えない景色を旅する」というテーマに立ち戻らせ、多様な専門分野を持つ会場の参加者に対し議論を開くものとしても機能していた。

「見えない景色」が生まれるとき、そこには環境や認識の変化をとまなう。それぞれの発表で示された変化への多様な反応は、それこそが自然／環境表象を再帰的に問う環境文学批評の射程の広さを示しているのではないだろうか。

【ASLE-Japan 例会報告】

## 読書会：生田武志『いのちへの礼儀—国家・資本・家族の変容と動物たち』

## ジェームズ・スタネスク他『侵略者は誰か?—外来種、国境、排外主義』

林 真 (明治大学・院)、戸張 雅登 (立教大学・院)

2019年6月2日に聖心女子大学で開催された読書会では、その前半に、生田武志『いのちへの礼儀—国家・資本・家族の変容と動物たち』(筑摩書房、2019.3)について、三名から報告が行われた。

高橋実紗子氏からは、本書の「前篇」を中心とした報告があった。高橋氏は本書が「動物の声」を読者に想像させる際の「翻訳」や「擬人化」に注目する。その上で、こうした方法を人間による語りの限界とだけ捉えるのではなく、想像という作業の繰り返しによって動物を理解し、本書が主張する「動物との共闘」を実現するための手段と捉える読みの可能性が提示された。

村上克尚氏からは「後篇」の内容を中心とした報告があり、そこで三つの問題提起がなされた。一つ目は本書で言及されるような小説作品だけでなく、詩的言語を介して他の生物の身体に変身し「脱領土化」されようとするような表現が「共闘」のひとつの形とみなし得るかという点。二つ目は、本書ではシームレスに接続されているドゥルーズ&ガタリとダナ・ハラウェイが架橋され得るのかという点。三つ目は、「共闘」にはジェンダーやセクシュアリティの攪乱も含まれるのではないかという点であった。

小谷一明氏からは、本書でも取り上げられている木村

友祐著『野良ビトたちの燃え上がる肖像』(新潮社)と本書との対応関係について精緻な考察が報告された。たとえば、『野良ビト』における肉食についての言及は、「倫理と現実」「感謝と現状追認」といった、『いのちへの礼儀』に登場する話題を通して読むことができる。その上で、「狂った現状」において「一緒に身悶え」する意味で「狂う」という木村氏の言葉(木村友祐「生きものとして狂うこと—震災後七年の個人的な報告」『新潮』2018年8月号)と「いのちへの礼儀」という言葉を接続する小谷氏の報告は、本書と木村氏の著作双方への深い理解を促すものであった。

三者の報告に共通していたのは、いかに動物に寄り添うか、いかに動物と共闘するか、ということに対する熟考であったように思う。本書が投げかける膨大な問いを受け止めるための重要なヒントを、これらの報告からたくさんいただいたように感じる。(林 真)

大野美砂氏によれば、『侵略者は誰か?』(以文社、2019.1)は「外来種は害をなす」というレトリックに批判的であり、そうした国家主義的レトリックは、19世紀前半のアメリカ排外主義と通じるものであるという。科学言説と呼ばれるものが、いかに恐怖言説を肯定する



ために用いられてきたか、また、今日の気候変動等に対応した改変可能な枠組みの構想について大野氏は言及した。

芳賀浩一氏は本書の問題点として、既存の語彙が「閉じられた生態系、新植民地主義の境界、人間中心的な分類法といった問題をはらむ概念に立脚」(4)していることを指摘し、その上で在来種数の推移を長い時間のなかで見ると歴史的な文脈の必要性を取り上げた。

自然なものと思われている動物観を解体するというテーマは『いのちへの礼儀』と同様で、本書もまたドゥルーズ&ガタリが議論の出発点になっている。報告の両氏とも、第一、二章における一元論や二元論の限界と多

元論的展開に着目した。両氏はヴィヴェイロス・デ・カストロの「あらゆる経験、現実の相違を認める」(58)多自然主義がもつ、存在多元論としての「創造性と多産性」(49)を紹介しつつ、レオポルドを例とした保全や復元における二元論の効用に関する議論にも言及した。最後に、システムへ過剰適応した人間は、動物との接触によって自らが生き物であることに気づかされるため、動物の管理問題とは人間の管理問題であろうとの指摘が会場の参加者からなされた。今後、閉じられた生態系から開かれた生態系への捉え直しのなかで、非在来種の役割が一層注目されるであろう。(戸張 雅登)

## 【大会報告】

# 2019 ASLE Conference: Paradise on Fire に参加して

芳賀 浩一 (城西国際大学)

今回で第13回目を迎えたアメリカASLE学会は、6月26日(水)から30日(日)までカリフォルニア大学デービス校(UC Davis)で開催された。筆者は、26日の夕方から参加して29日午前に自身の発表を行い、そのまま帰国の途に就いた。

アメリカでの学会参加は3年ぶりだがASLE学会やUC Davisは初めてである。特に今回はサンフランシスコ国際空港から地下鉄と列車を乗り継いでデービス入りするというアメリカでは稀な移動となった。デービス駅とキャンパスの距離が徒歩10分程度であることが決め手となったが、列車が時刻通りに運行されているかどうかはかなり半信半疑であった。学会参加者の多くはスクラメントからバスでデービスに来ていたようだ。しかし鉄道を選んで正解だったと思う。サンフランシスコの地下鉄の乗客との僅かなやり取りはアメリカ社会に触れるいい機会であったし、長距離列車の車窓から見える雄大な景色はつらい時差ボケをしばし忘れさせてくれた。

会場となったUC Davisは牧草地帯の中に突如現れたキャンパスタウンの中にあり、多様な樹木に多くの野生の鳥が生息するキャンパスはASLE学会にふさわしい環境だった。発表当日の朝、緊張しつつホテルを出たところで眼の前を野生のキジが悠々闊歩するのに出くわし、思わず見とれてしまうこともあった。

今回の学会は、サブタイトルがParadise on Fireとなっており、カリフォルニア州の山火事をひとつのテーマとしていたが、残念ながら私はこのテーマの発表を聞くことはできなかった。過去に参加した経験のある方のご承知の通り、ASLEの大会は非常に規模が大きく、同時時間帯に20近いパネル発表が行われている。これほど多いとまず自分が見に行くパネルを選ぶのが一苦労だ。そして今回やや問題となったのが広大なキャンパス内の移動である。発表や講演の会場が約10か所に分散していたため、次の会場まで最短距離を歩いても20分程度かかるケースもあった。初めてキャンパスを訪れた参加者がほとんどで、道に迷うこともしばしばである。私が見に行ったある発表では、コーディネーターが30分以上遅れて教室に到着し、ひたすら陳謝するという場面もあった。

私は個人的な関心から、「人新世」や「災害・廃棄物」といったテーマを中心に見て回ろうと決めていたが、そ

ういった発表に限って同時時間帯に行われていたり、会場が遠く離れていたりしたため、当初の期待からすると実際に聞くことが出来たのは半分程度だった。今振り返ると、今回の学会で最も面白かったのは、デービスに到着した直後に会場が近いという理由だけで足を踏み入れたパネル「21st Century Climate Fiction」だった。各発表者が、レイモンド・ウィリアムズ、ラトゥール、ゴッシュ、ハラウェイといった理論家の概念を検討しつつ、現代のCli-fiをいかに評価することが有益かを語っていた。

また、28日(金)のウルズラ・ハイザ氏の基調講演は、大量の資料を惜しげもなく披露しつつ、SF作品を絡めながら都市の生物多様性の重要性を訴えるもので、その成果の一端はインターネットの「Urban Ark Los Angeles」(2018)プロジェクトで公開しているとのことである。日本の会員にもハイザ氏を知る方は多いと思うが、講演会場では彼女が北米のASLE会員たちにとってメンターのような存在であり大変慕われていることを改めて実感した。

ASLE大会は多様なテーマに関する発表が一度に行われるため、誰にでも参加しやすい雰囲気があり、これからの研究テーマを考える上でとてもいい刺激になった。また、朝6時のハイキングから夜のソーシャルまで、大会を通して様々なイベントが切れ目なく企画され、会員同士の交流が促されていたことも新鮮だった。大学の授業期間中であるため日本から参加するのは容易ではないが、ASLEの良さを継承していくためにも今後の参加が増えることを期待している。



## 【ご著書紹介】

## 『日本近現代文学における羊の表象—漱石から春樹まで』(彩流社、2018.1)

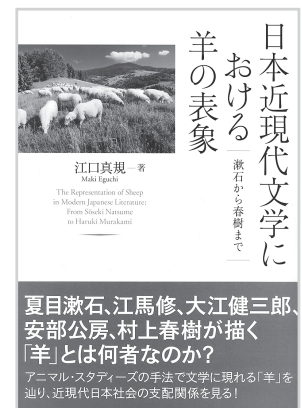
江口 真規 (筑波大学)

本書は、アニマル・スタディーズの手法と目的意識に基づき、日本近現代文学における羊の表象の変遷とその文化的・社会的意義を考察するものである。羊は牧畜・放牧地域の生活形成に大きく関与してきたが、日本では明治時代以降、欧化政策の一環として輸入された動物である。そのため、近代以前には想像上の生き物として表されていたが、西欧文化の流入や文学作品の翻訳により、従順・無垢・犠牲といったイメージが広まっていった。物理的に不在であるか、または遭遇の機会が限定されているために、日本における羊の表象は社会状況に影響を受けた想像力によって構築されてきた。

全5章からなる各章では、ポストコロニアル批評やジェンダー理論を用いた作品分析を行うとともに、農畜産統計や絵画・写真から読み取れる同時代言説を分析の対象としている。本書で取り扱う作品は、「迷羊(ストレイ Sheep)」という語句がみられる夏目漱石の『三四郎』(1908)にはじまり、村上春樹『羊をめぐる冒険』(1982)に至るまでの、明治から昭和にかけて羊を象徴的に用いた小説群であり、江馬修『羊の怒る時』(1924-25)や、「らしゃめん(羅紗緬)」女性をめぐる物語、安部公房の

短編小説などを含む。

本書の試みの理論的基盤となるのは、アニマル・スタディーズの手法と目的意識である。アニマル・スタディーズとは、動物と人間の関係や共生のあり方を考察する、人文学や自然科学を融合した学際研究の一領域であり、序章では近年の研究動向について概要をまとめた。本書は2015年に提出した博士論文に加筆・修正を施したものであるが、文学研究者だけではなく、羊に興味がある人、個々の作家や作品に興味がある人にも、手にとって頂ければ幸いである。特に、動物と文学や文化について研究したいが、どういった方法があるのかわからないという人にとって、拙いものではあるが本書が一つの指針となることを願っている。



## 文献情報 (2019年3月~2019年10月)

## [2019年3月]

- Adeline Johns-Putra, *Climate Change and the Contemporary Novel* (Cambridge UP)
- Hande Gurses, Irmak Ertuna Howison (Eds.), *Animals, Plants and Landscapes: Perspectives on the Non-Human in Literature and Culture* (Routledge)
- Sabine Wilke, Imke Meyer, Japhet Johnstone, *Readings in the Anthropocene* (Bloomsbury)
- 千葉一幹『現代文学は「震災の傷」を癒せるか—3・11の衝撃とメランコリー』(ミネルヴァ書房)

## [2019年4月]

- Louise Squire, *The Environmental Crisis Novel* (Routledge)
- Margarita Estévez-Saá, María Jesús Lorenzo-Modia, *The Ethics and Aesthetics of Eco-caring* (Routledge)
- 吉永明弘, 福永真弓『未来の環境倫理学』(勁草書房)
- ブライアン・バクスター(著), 松野弘, 栗栖聡, 松野亜希子, 岩本典子(訳)『エコロジズム—「緑」の政治哲学入門』(ミネルヴァ書房)

## [2019年5月]

- John Claborn, *Civil Rights and the Environment in African-American Literature, 1895-1941* (Bloomsbury)
- Rachel Dinitto, *Fukushima Fiction: The Literary Landscape of Japan's Triple Disaster* (U of Hawaii P)
- Rod Giblett, *Environmental Humanities and the Uncanny* (Routledge)
- Timothy Clark, *The Value of Ecocriticism* (Cambridge UP)

- 松永京子『北米先住民作家と<核文学>—アポカリプスからサバイバンスへ』(英宝社)

## [2019年6月]

- Elizabeth M. Deloughrey, *Allegories of the Anthropocene* (Duke UP)
- Gabriel R. Ricci, *Natural Communion* (Routledge)

## [2019年7月]

- Laurence W. Mazzeno, Ronald D. Morrison (Eds.), *Victorian Writers and the Environment: Ecocritical Perspectives* (Routledge)

## [2019年8月]

- Julia Daniel, Margaret Elizabeth Konkol, *Modernism in the Green* (Routledge)
- Scott Romine, Zackay Vernon (Eds.), *Ecocriticism and the Future of Southern Studies* (Louisiana State UP)

## [2019年9月]

- Maura Coughlin, Emily Gephart (Eds.), *Ecocriticism and the Anthropocene in Nineteenth Century Art and Visual Culture* (Routledge)
- 伊藤詔子, 一谷智子, 松永京子(編著)『トランスパシフィック・エコクリティシズム』(彩流社)

## [2019年10月]

- Gregers Andersen, *Climate Fiction and Cultural Analysis* (Routledge)
- 吉川朗子, 川津雅江(編著)『トランスアトランティック・エコロジー—ロマン主義を語り直す』(彩流社)



## 【シリーズエッセイ 風景のカタチ (7)】

## “Water Gone?” — トリニダード・トバゴ滞在記

三宅 由夏 (東京大学・院)

トリニダードに到着して間もない頃、西インド諸島大学の構内で偶然知り合った大学院生のディオロンとともに夜の街を歩いた。トリニダードでは「ダブルズdoubles」という、ヒヨコ豆をカレースライスで煮込んだものにシャドウベニ<sup>1</sup>のソースを加え、バラと呼ばれる平たい揚げパンに包んだストリートフードが小腹を空かせた時の定番で、評判のいい店がキュレップ地区にあるらしい。まだ右も左もわからない私に、ディオロンは「とにかくまずは旨いダブルズを食べなよ」と気を利かせて連れてきてくれたのだ。店は、元気なおじさんが一人でやっている移動式屋台のようなもので、私たちが注文を言い終わらないうちに「お前、中国人か。そっちはベネズエラ人だな」と、嬉しそうに言う。どちらも見事に外れていたが(ちなみにディオロンは生まれも育ちもトリニダード。よく間違えられる、とやはりこちら人も懐っこい笑顔を浮かべていた)、その言い方には何の嫌味もなかったの、挨拶代わりのようなものなのだろう。この会話をしている間にささっと作りあげ、「どこの人だって、きっと気に入るよ」とあつあつのダブルズを茶色の紙袋に入れて手渡してくれた。

大学院の授業課題で忙しくなると、料理する時間も惜しまざるをえなくなり、手軽で美味しくて安価なダブルズに度々お世話になった。セゼールを読んでもダブルズ、マッケイを読んでもダブルズ、ハラウエイを読んでもダブルズの日々である<sup>2</sup>。ところで、ダブルズには肉や魚が入っていない。おじさんが「どこの人だって気に入る」と言う秘密がこれである。トリニダードの人種構成は特殊で、アフリカ系とインド系の人たちがいずれも4割ほど、残り2割が南米系や中華系などで、それだけに食文化も多様である。当然、宗教上の理由で食べないものがある人や、ビーガン指向の人もいる。そんな場所で誰もが美味しく食べられるのが、ダブルズなのである。

このように、暮らしてみても初めて実感する、文化的・歴史的背景の厚みというのが確かにある。食と並んで強烈なインパクトを受けたのは、音楽だった。この国はスティールパンと呼ばれる石油缶から手作りするドラムの発祥地として知られているが、私が滞在していた8月から12月はパンの活躍するカーニバルの時期(2月頃)ではなく、クリスマスに向けた準備期間と重なっていたこともあり、滞在後半に至る所で耳にしていたのは「パランParang」と呼ばれる音楽だった。

初めてこの音楽を聴いた時に驚いたのは、スペイン語で歌われていたことだった。たしかにトリニダードは1797年に英領となる以前にはスペインの植民地だったが、その後200年以上、公用語として話されていたのは英語だった。そんな国を代表する音楽の一つが、なぜスペイン語で歌われているのか。パランの町として有名なロピノーという場所を訪れると、自らも演奏者であるマルティン・ゴメスさんから話を伺うことができた。

パランという名前は、スペイン語の“parranda”(=お祭り騒ぎ)と“parar”(=止まる)に由来すると言われており、その名の通り賑やかな音楽で、クリスマスの時期になると楽団が家々に「立ち止まって」演奏をする習慣がある。この音楽をもたらししたのは、南米のベネズエラやコロ

ンビアからの移民(つまりスペイン語話者たち)だった。現在ロピノーにいる演奏者たちはスペイン語を話さないし、理解できない。それでも、パランをスペイン語で歌い続けているのだ。パランはクリスマス音楽としてトリニダード全体に波及したが(こちらは英語で歌われることもある)、本場の一つであるロピノーでは、農園で収穫したカカオの実を足裏で踏みほぐす行程を踊りながら行う際にも演奏されていた。実際、パランが流れ出すと自然と身体が動きだし、手を取り合って踊りだしたくなる。

滞在終盤のクリスマスが近いある日、友人宅で行われたパーティーで、パラン楽団の演奏を再び聴くことができた。まさに歩く楽団といった風情で、彼らが演奏しながら玄関から入ってくると「パランの響きと一緒に、熱帯のクリスマスが私の元にもやって来たのだ!」という、浮き立つような、しかし同時に厳かな感覚に満たされる。隣で静かに演奏に耳を傾けていたカップルは、最近ベネズエラから移り住んだ人たちで、「この歌は向こうでもよく聴いていたよ」と懐かしむように目を細めていた。

ベネズエラは、トリニダード島の南端に行けばその影が水平線にくっきりと見えるほど近い。政治的・経済的に不安定な時期にあり、合法・違法を問わず、多くの人たちがトリニダードへ渡ってきている、と刑務所で働いているジョエルは言っていた。そういう事情でトリニダードに暮らし、その間刑務所に入るようになった人たちとも直接言葉を交わせるようにと、彼はスペイン語を学んでいるという。大学のベンチで本を読んでいた時、偶然隣に座っていた彼は、そんなことを訥々と話し始め、私がトリニダード英語の表現を勉強中だと知ると、おもむろに“Water Gone?”とノートに書いた。「これ読んでみて」と言われるままに読むと、「そうそう、その発音がトリニダード英語だと《調子はどう?》<sup>3</sup>って意味になるよ」と言う。奇しくもその数日前まで大洪水の余波で寮は断水状態(The water was gone)だったので、思わず笑ってしまった。トリニダード英語の訛りの激しさや独特な表現は有名で、著者自身、とくに初めの頃は聞き取れないことや理解できないことも多かった。仲介となってくれる(標準英語に言い換えられる)友人たちには度々助けられ、様々なことを教えてもらった。ここにあらためて感謝の意を示したい。

## 注

1. トリニダードで最もポピュラーなハーブの一種。ヒンディー語では「パンダニア」という。多民族国家であるトリニダード・トバゴでは、同じものが数種類の呼び名をもつことが多々ある。
2. なお、紙面の都合上、本エッセイではカリブ海文学に触れることは出来なかったが、ちょうど私がトリニダードへ渡る直前に、この国出身のノーベル文学賞受賞作家V・S・ナイポールが85歳で亡くなり、各地で追悼イベントが開かれていた。トリニダードの人々に興味を持たれた方には、彼の処女作『ミゲル・ストリート』(岩波文庫)をまずはお薦めしたい。
3. いわゆる標準英語で“How’s it going?”にあたる表現。トリニダードでは“Watta gwan?”という言い方になる。つまり、“Water Gone?”の読み方自体、トリニダードでは特徴のあるイントネーションになる(たとえばRを巻き舌にしない)。さらに、他の人にもこの表現について聞いてみたところ、どうやらこれはどちらかというところジャマイカ英語に由来するもので、人の絶え間ない移動によって次第にトリニダード英語の一部となっていたらしい。これもまた、非常にカリブ海地域らしいエピソードである。

## 事務局より

■2019年度 ASLE-Japan / 文学・環境学会  
第2回役員会・総会のご報告

2019年8月31日(土)並びに9月1日(日)、大東文化会館(東京都板橋区徳丸2-4-21)において、第2回役員会並びに総会が開かれました。まず審議事項として、2018年度会計報告および監査報告、2019年度予算案が提案され、審議の結果、承認されました。また一部役員改選案、2020年度全国大会案、郵送回数削減案、会誌データ委託案、2020年ISLE-EA開催案が審議を経て、了承されました。ニューズレターの発行、会誌22号の進捗状況、現会員数、院生組織の活動についての報告がありました。併せて2019年度全国大会が行われました。多数の発表、シンポジウム、講演が行われ、活発な議論がありました。

## 第7回 ISLE-EA企画実行委員より

2020年11月21日(土)と22日(日)に神戸の甲南大学岡本キャンパスにて、第7回東アジア環境文学国際シンポジウム(ISLE-EA)を開催します。いまのところ、仮のテーマとして「自然災害と復興」を掲げ、準備をすすめております。神戸は1995年に阪神大震災を経験しましたが、その後も日本では中越地震や東日本大震災、熊本地震や豪雨災害など、自然災害が頻発しています。自然災害の経験はどのように活かされてきたのか、また文学作品にどのような影響を及ぼしてきたのか。さらに、自然自体の復興や回復も視野に入れながら、熱い議論が繰り広げられることを期待しております。詳細は12月にお知らせする予定です。ぜひ、ご参加ください。

第7回ISLE-EA実行委員長 浜本 隆三

## &lt;会費納入のお願い&gt;

2019年度の年会費(一般5,000円、学生2,000円)の納入をお願いいたします。

## ゆうちょ銀行

口座番号 01300-0-93821

加入者名 文学環境学会

(フリガナ:ブンガクカンキョウガッカイ)

※ゆうちょ銀行以外の銀行から振り込みされる場合は以下の情報をご利用ください。

ゆうちょ銀行 一三九(いちさんきゅう)支店

(店番:139) 当座預金口座番号:0093821

## &lt;終身会員制度をご活用ください&gt;

「終身会員制度」につきましては、本学会ウェブサイトの入会案内にも掲載しています。多くの方々が終身会員となっております。是非とも終身会員制度をご活用いただき、本学会に末永くご指導を賜りますようお願い申し上げます。

- ◆ASLE-Japan 文学・環境学会では、今号をもちまして、Newsletterの紙媒体での発行を終了し、次号からはPDFでの発行のみとすることに致しました。次号からは本会HP(<https://www.asle-japan.org/>)のPublicationsにてご覧頂けます。会員の皆様にはMLを通じて発行のお知らせ等をさせて頂きましますので、差しつかえない方は事務局へMLへの登録をお願い致します。
- ◆ニューズレター編集委員会では、会員の皆さまからのご寄稿(エッセイ、批評、書評等)、イベント・文献情報を随時募集しています。MLでも告知いたしますので、是非、積極的にご参加ください。詳細については各編集委員へもお問い合わせください。

## 広報より

広報では、会員の皆様からお寄せいただいたご活躍の情報を学会のウェブサイトに掲載しております。アドレスは以下のとおりです。

<http://www.asle-japan.org/publications/>会員による出版物/

今後も定期的に情報の更新をしてゆきますので、皆様のご出版やご活動等の情報を広報委員の塚田幸光(hiro2827★gmail.com)までお送り下さい。次回の更新は2020年5月ごろを予定いたしておりますが、情報のご連絡はいつでもお待ちしております。これまでに情報をお寄せ下さっている先生方は、どうぞ新しい情報のみをご連絡下さい。できるだけ多くの方々からのご連絡をお待ちしております。どうぞよろしくお願ひいたします。

ASLE-J 広報委員 喜納育江、塚田幸光、松永京子

## &lt;会員情報の訂正・更新について&gt;

会員の皆様にお願ひして参りましたが、連絡先住所、電話番号、メールアドレスに変更がありましたら、すみやかに学会ホームページの該当箇所をご参照いただき、担当役員にご連絡ください。ご協力の程、よろしくお願ひ申し上げます。

..... 編集後記 .....

今号の編集集中、国連気候行動サミットのニュースが連日テレビで放映されていた。一時的にはグレタさんを16歳という点でフォーカスするも、多くは新米環境相の言動を取りあげて、肝心の気候変動については話題の枕扱いである。日本の大手メディアというものに、世相を感じざるを得ない。誰に向けて発信しているのか。馬鹿にされているのは私たち視聴者であるとも思える。今号から編集責任を任せられ、ASLE-Japanの外に向けて発信する窓口としての重責を感じている。我々はどう見られるのか、いや、どう見られたいのか。次号からNewsletterはPDFのみの発行となるが、紙という枠を超えて、より発信力のある媒体にしたいものである。会員の皆様の積極的な参加と発信をお願いするものである。(Y・S)

【発行】代表 結城 正美(金沢大学)

事務局 辻 和彦(近畿大学)

〒577-8502 大阪府東大阪市小若江3-4-1

E-mail: twain1910★gmail.com

【編集】編集代表 澤田由紀子(甲南大学・非)